

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Preliminary Report of the Halmahera Research Project by National Museum of Ethnology

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石毛, 直道 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00004613 |

国立民族学博物館
ハルマヘラ調査隊概報

石 毛 直 道*

1. 調査経過

1・1 調査の概要

インドネシア共和国マルク諸島（旧名モルッカ諸島）北部のハルマヘラ島は、東南アジア文化と太平洋文化の接点に位置する。すなわち、言語学的には、ニューギニア方面の言語と関連をもつと考えられる非オストロネシア系の言語である北ハルマヘラ語群の言語を話す住民が同島の北部に居住し、南部はオストロネシア系言語の住民によって占められている。また、生業経済としては、サゴヤシ澱粉の採集のほか、太平洋の島嶼の農業と共通性をもつ焼畑根栽農業を残すほか、東南アジア島嶼部と共通する陸稲、雑穀類の焼畑農耕もおこなわれている。このような東南アジア、太平洋の文化史研究上重要な位置にありながら、同島についての民族学的報告はきわめてすくなかった。

国立民族学博物館では、同島の民族誌的現地調査をおこなうことを立案し、昭和51年度文部省海外学術調査補助金の交

付をうけた。また、インドネシア科学局（略称 L.I.P.I., Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia）から、調査許可を取得、同局からアンボン島にある Patti Mura 大学を現地における受入機関として指定され、同大学との共同調査という形式での現地調査をおこなうことになった。

この調査隊は、国立民族学博物館の研究者6名、Patti Mura 大学からの研究者1名から構成された。ハルマヘラにおける現地調査は1976年9月から12月にかけておこなわれた。調査の主な対象地は、ハルマヘラ島北部の Galela 地区にある Limau という小村落である。Limau は、非オストロネシア語のうちの Galela 語を話す住民を中核として形成された村である。Limau における主な調査事項は下記の5点に要約される。

- 1) 村落のコミュニティ・スタディと村民の生活の民族誌的記載
- 2) 農業、サゴヤシ採集、漁業に関する民族誌的記載
- 3) 非オストロネシア系諸言語の言語学的調査
- 4) 有用植物の民族植物学的調査
- 5) 民俗分類学 (folk-taxonomy) の調査
- 6) 民間信仰、呪術の調査

なお、調査にあたって使用した言語は主としてインドネシア語を媒介としており、またハルマヘラのほとんどの住民がインドネシア語を解する。

1・2 隊員構成

隊長 石毛直道 助教授 第5研究部
隊員 和田祐一 教授 第3研究部
佐々木高明 教授 文学博士

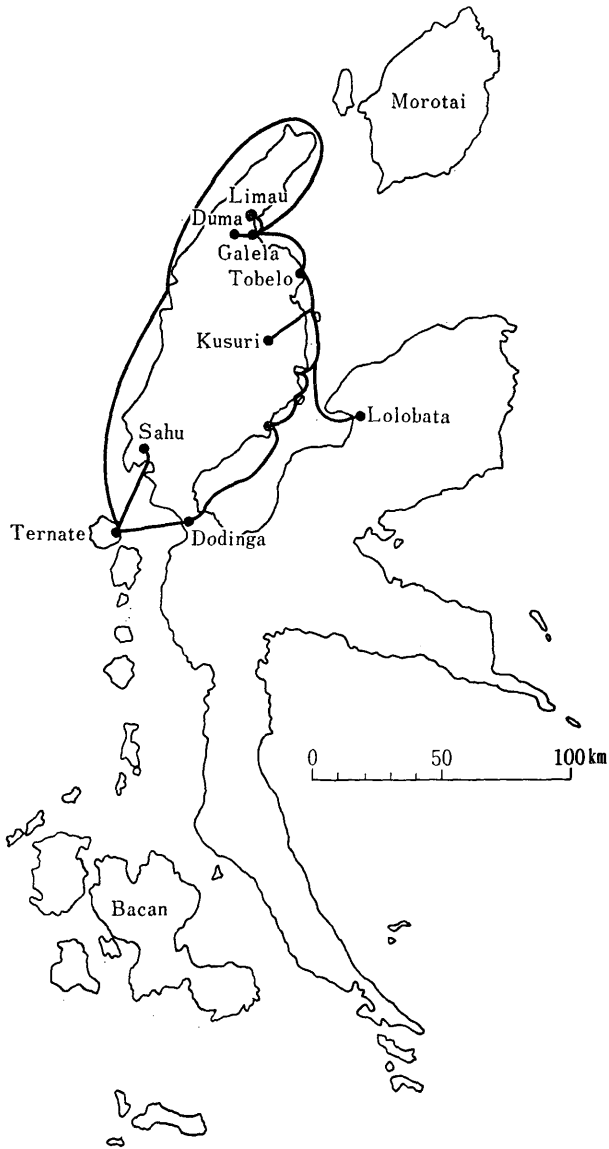
* 国立民族学博物館第5研究部

第2研究部
 松澤員子 助教授 第1研究部
 吉田集而 助手 薬学博士
 第2研究部
 大胡 修 助手 第1研究部
 現地参加隊員
 Zakarias A. F. Soukotta, Research Fellow, Dept. of Agriculture, Patti Mura University

1・3 調査日程

1976年

- 8月24日 石毛, 吉田, ジャカルタ着。
 L.I.P.I. その他関係官庁との事務折衝にあたる。
- 9月4日 和田, 佐々木, 松澤, 大胡, ジャカルタ着。
- 9月9日 石毛, 和田, 吉田, 大胡, アンボン着。
- 9月10日 佐々木, 松澤, アンボン着。
 9月13日まで Patti Mura 大学との調査打合せ, 博物館見学。吉田, バナナの採集をおこなう。
- 9月14日 日本側隊員全員 Ternate 島着。
- 9月17日
 ~21日 石毛, 佐々木, 吉田, チャーターボートを乗りつぎ, ハルマヘラ島北部東海岸の予備調査をおこなう。
 この間に訪れた主な村は, Dodinga (Jailolo 郡), Bonagigo, Kau, Patan, Pediwan (以上, Kau 郡), Tobelo (Tobelo 郡), Puma, Makete, Limau, Laloga (Galela 郡) で, 各村における農業の概況を主とする聞きとり調査をおこなう。その結果 Limau を主な調査地とすることに決定。この間, 18日 Patti Mura 大学からの現地参加隊員 Soukotta が Ternate に残留の隊員に合流。
- 9月23日 石毛, 吉田, Soukotta, ボートをチャーターし, ハルマヘラ島北部西海岸の Liti, Ngaon, Caminial の3村 (Sahu 郡) の農業概況の予備調査をおこなう。
- 9月27日
 ~30日 全員 Limau にむけて定期船を利用して出発。ハルマヘラ島北部西海岸から Bisoa 岬を經由, 30日未明 Soa-sio で下船, 同日, ボートをチャーターして Limau 着。
- 10月1日 Limau における調査開始。
- 10月19日
 ~23日 石毛, 吉田, 狩猟採集民の定着村である Kusuri 村 (Tobelo 郡) の調査をおこなう。
- 10月20日
 ~23日 松澤, Soukotta, Duma 村 (Galela 郡) で調査をおこなう。
- 10月3日
 ~16日 佐々木, Soukotta, Sahu 郡の Loce 村における調査をおこなう。
- 11月18日 和田, 松澤, Limau 発。Ternate 島で佐々木に合流, アンボン経由で帰国の途につく。11月30日和田, 松澤, 12



月 5日 佐々木, 日本着。

12月 1日

～ 5日 石毛, Lolobata 村 (Wasile 郡) の調査。吉田は 1日 から 6日 まで Duma 村 (Galela

郡) の調査。

12月 9日 石毛, 吉田, 大胡, Soukotta, Limau 村 の調査を終り, Ternate 島着。吉田は Ternate で言語学的調査をおこな

- う。
- 12月14日 石毛, 吉田, 大胡, Soukotta, アンボン着。17日, 石毛, Patti Mura 大学において講演をおこなう。
- 12月20日 ジャカルタにて, L.I.P.I. に調査報告書, Final Report of Ethnographical Study of Agriculture and Language in Halmahera を提出。24日吉田, 26日石毛, 30日大胡帰国。

2. 調査事項

2・1 Limau における村落調査

Limau 村はハルマヘラ島 Galela 郡の村落であり, 郡庁所在地の Soa-sio から約 6.5 km, 船外機つきのボートで1時間半北上した海岸に位置する。調査時の人口は241人, 戸数は41戸である(この数字は村長の統計による。われわれが家族構成について全戸の面接調査をおこなった結果では, この数字に多少の異動がある)。村民のおおくは Galela 郡で生れた者によって占められるが, 戸主についていえば19人は Morotai 島, Wasile 郡, Kau 郡など他の地区から移住してきた者である。Galela 郡以外からの移住者も系譜的には Galela 人である者がおおいが, 少数の Wasile 郡からの Maba 人など Galela 文化以外の文化に所属する者も村民として存在する。しかしながら, 村内の法的秩序は Galela 人の慣習法にもとづいてたもたれており, よそからの移住者も日常会話に Galela 語を使用するなど, Galela 人の文化・社会によって統合されている村としての性格が

つよい。村にはイスラム教寺院とプロテスタント教会があるが, イスラム教徒の戸数33にたいして, キリスト教徒の戸数は8戸にすぎない。ほかに村の公的機関としては, 小学校(教師1名)がある。

村人のほとんどが農業を主要な生業としており, 漁業もおこなうが, これらの生産物のほとんどは自家消費用であり, 村民の生計の主要部分は自給自足経済に依存しているといえる。現金収入の方法としては, サゴヤシ澱粉, サゴヤシの葉製の屋根材, 材木, コプラ, 燻製魚を主として郡庁所在地の市場に売ることによる。

Limau 村人の日常生活および Galela 人の民族誌に関する調査としては, 以下の項目があげられる。

- 1) Galela 人の歴史に関する伝承の採集——吉田, 松澤
- 2) Limau 村の歴史に関する伝承の採集——吉田, 松澤, 石毛
- 3) 村の自然環境と地形, 植生(模式植生図の作成をふくむ)——吉田, 佐々木
- 4) 村域主要部分地形概念図作成(畑, サゴ林の分布をふくむ)——佐々木, 石毛
- 5) 集落の実測図作成——佐々木, 石毛, 大胡, 吉田
- 6) 家族構成と親族, 姻族の系譜関係(全戸にわたる面接調査をおこなう)——松澤, Soukotta
- 7) 親族集団の概念と機能——松澤
- 8) 村内組織(行政, 宗教, 共同労働組織など)——松澤
- 9) 通過儀礼——松澤, 大胡, 石毛
- 10) ライフ・ヒストリーの聞きとり——石毛
- 11) 男女分業と生活時間——石毛

- 12) 家計——石毛
- 13) 日常生活に関する物質文化（各種実測図の作成をふくむ）——石毛
- 14) 食事と料理法（11戸に毎食の食事内容と料理法を記入してもらう調査をふくむ）——石毛
- 15) 食物と味覚に関する価値観——石毛

2・2 Galela 人の生業経済の調査

Limau 村民の生業経済の主なものは、サゴヤシ澱粉の採集、バナナ、マニオク、サツマイモ、オカボを主要作物とする焼畑農業、自家消費を主とする漁業である。焼畑農業の実態調査については、Limau 村ばかりでなく、佐々木、Soukotta によって Sahu の Loce 村の資料も集められている。

- 1) 作物の種類——佐々木
- 2) 焼畑の分布——佐々木、Soukotta
- 3) 焼畑経営の実態（作付実測図の作成をふくむ）——佐々木
- 4) 農業暦——佐々木
- 5) 農耕儀礼——佐々木、石毛
- 6) ハルマヘラ農業の歴史的変遷——佐々木、石毛
- 7) サゴヤシ澱粉製造の記載——石毛、佐々木、大胡
- 8) サゴヤシを材料とする物質文化——石毛、佐々木、大胡
- 9) サゴヤシ澱粉の料理法——石毛、佐々木、松澤
- 10) ココヤシ栽培とコプラ——佐々木
- 11) 漁法と漁具（全戸における漁具の悉皆調査をふくむ）——大胡、Soukotta
- 12) 漁業暦——大胡
- 13) 船（実測図作成をふくむ）——大

胡

- 14) 狩猟と狩猟用具——石毛

2・3 民族植物学的調査

約1000点の植物標本を Galela 語名称とともに採集したが、そのほとんどは Galela 人が有用植物として利用するのである。

- 1) 野生植物の利用法——吉田
- 2) 栽培植物の品種学的分類と利用法——吉田

2・4 Galela 語の言語学的調査

Galela 語は非オストロネシア系の言語である北ハルマヘラ語群に属する。Galela 語の言語学的調査としては前世紀末に Baarda の作成した辞書があるのみである (Baarda, M. J., “Woordenlist Galelareesch—Hollandsch, met Ethnologische aantekeningen” ‘s-Gravenhage, 1895)。

Limau 村においては Galela 語が日常会話にもちいられた。村に移住してきた Maba 人など他の言語を母語とする者も、村内では Galela 語を使用する。国語であるインドネシア語は小学校での教育のさいの言語および公式の会合や Galela 以外の場所から村を訪れた者との会話にもちいられる。成人男性のすべてがインドネシア語を解するし、他の北ハルマヘラ語群の言語——とくに Tobelo 語——を話すバイリンガルな言語生活のみとめられる。しかし、40才以上の女性および就学前の児童は Galela 語を話すだけである。

現在の Galela 語には、インドネシア語および歴史的に Galela 文化と関係が深かったサルタンの宮廷の所在地の言語

である Ternate 語の影響によると考えられる変化がみられる。すなわち、本来は開音節である Galela 語の語尾が閉音節化する現象、多量のインドネシア語彙の採用などがそれである。

テープレコーダを使用して口承伝説、日常会話などの録音もおこなわれた。口承伝説については、インドネシア語の正書法にもとづく文字化をおこない、語彙および語句についての注釈を付する作業をおこなった。

- 1) 基本語彙の採集 (Galela 語, Tobelo 語, Loloda 語, Tobaru 語, Patani 語, Mabiau Barat 語, Mabiau Timur 語, Maba 語, Bacan 語, Sulu 語) ——和田, 吉田
- 2) Galela 語の音韻論的調査——和田
- 3) Galela 語の統辞論的調査——和田
- 4) Galela 語の形態論的調査——和田
- 5) Galela 語口承伝説の録音とその文字化, 語彙・語句の注釈作成およびインドネシア語へのほん訳 (主として Galela の起源説話をあつかった) ——和田
- 6) 日常会話の録音とその分析 (Galela 語での会話にまじえられるインドネシア語彙の調査など) ——和田
- 7) Galela 語におけるインドネシア語の影響の調査 (語彙, 音韻, 統辞論の各側面について) ——和田
- 8) Galela 語社会におけるインドネシア語の変容 (音韻, 語彙, 統辞, 意味論の各側面について) ——和田

9) 二重言語生活の言語社会的調査 ——和田

2・5 民俗分類と親族名称の調査

農業と言語をむすぶものとして、作物に関する品種学的分類とあわせて民俗分類 (folk-taxonomy) の調査がおこなわれた。また、時間・空間をあらかず言語の成分分析をおこなうことにより、認識体系の調査をおこなったが、非オストロネシア諸言語において、方向と距離に関する精巧な認識体系が存在することが注目される。

- 1) サゴヤシの品種学的分類と民俗分類——吉田
- 2) バナナの品種学的分類と民俗分類——吉田
- 3) オカボの育成過程に関する民俗分類——吉田
- 4) 時間の民俗分類 (年, 月, 1日の時間) ——吉田
- 5) 方向と位置の民俗分類 (Galela 語のほかは Tobelo 語, Loloda 語, Tobaru 語, Ternate 語, Mabiau Barat 語, Mabiau Timu 語, Maba 語, Weda 語, Bacan 語, Sulu 語における比較調査をふくむ) ——吉田
- 6) 親族名称——松澤

2・6 民間信仰と呪術の調査

すべての Galela 人はイスラム教徒あるいはキリスト教徒のいずれかの宗教に属しているが、呪術にともなう祖霊, さまざまな精霊, つきものなどに関する民間信仰が残存している。これら超自然的存在は、農耕儀礼, 病気の原因と治療法などに関係しながら, Galela 人の精神生

活にまだまだ深い影響を与えている。

- 1) 日常生活におけるイスラム教，キリスト教——松澤，石毛
- 2) Galela 人の起源神話と固有宗教——石毛，松澤
- 3) 祖霊，精霊，妖怪，幽霊，つきものに関する伝承——石毛
- 4) 呪術と病気——石毛，吉田

3. 調査のまとめ

今回の調査で収集したすべての資料は、

国立民族学博物館で保存し，整理研究される。ただし，植物標本のデュプリケートは Herbarium Bogorensense of Indonesia に寄贈されている。資料の分析，整理は，国立民族学博物館の共同研究班である「ハルマヘラ島の民族誌的研究」チームの手によっておこなわれる。その結果は本誌をはじめとする関係学会誌に論文のかたちで発表されるほか，将来全隊員の執筆になる英文報告書を公刊する予定である。